

パーム油を考える

峠 隆一

1990年に入ってから、「地球に優しい」という言葉が定着しました。そのいくつかは、パーム油を使った石鹸、シャンプー類や洗剤なども目にするがあります。

1990年頃といえば、東南アジアでの熱帯林破壊のことが盛んに報道されていました。今、それを伝えるメディアはありませんが、問題が終わったわけではありません。マスコミが目を向けなくなっただけです。今現在も、過剰な商業伐採に、たとえばボルネオ島の熱帯林に住む先住民族は苦しんでいるのです。

だが今、その彼らをして「伐採はまだまだ！」と叫ばせる大問題が進行しています。それが今日お話しする「油ヤシプランテーション」です。

今、マレーシアとインドネシアは世界のパーム油生産の約8割を担っています。ここで、両国のすべてのプランテーションに問題があるとはいいません。まっとうに運営されているところはもちろんあります。しかしながら、問題を生み出すプランテーションが少なくないのも事実です。

今回は、メディアがほとんど伝えない、油ヤシプランテーションでの問題点を少しでも知っていただき、その上で、改めて「地球にやさしい」とは何なのかをご考慮いただければと願います。

1：基本用語 「パーム油」と「ヤシ油」

ヤシ油とはココナツの胚乳から採れる油、パーム油は油ヤシから採れる油のこと。パームの和訳はヤシだから同じ意味に取られるが、区別して考えましょう。ちなみに、「パームヤシ」という言葉も和訳すれば「ヤシヤシ」なので、見直す必要があるかもしれません。

油ヤシからは、果肉から搾油する「パーム油」と、種から搾油する「パーム核油」の2種類があります。また、パーム油は、絞ったての「粗油」、それを精製した液体部分の「パームオレイン」、固体部分の「パームステアリン」などへと加工されます。ここでは、これらをまとめて「パーム油類」と呼びます。

2：主な生産地

パーム油は全世界で約3300万トン生産されている(2004年)。その半分弱がマレーシア一国で生産されている。日本は、輸入量50万トンのほぼ100%をマレーシアから輸入する。

3：なぜパーム油類は売れるのか

2005年、パーム油は大豆油を抜き、油脂類の中で一番の生産量を記録しました。それだけ売れる理由は以下の通りです。

安い	あらゆる油脂類の中で一番安い一つ。
高単収	haあたりの収穫高約4トン。2位の綿実油1.6トンの倍以上。大豆油は450キ口。
安定収穫	年中、収穫できる。
安定輸入	オレオケミカル目的なら、政情不安定な中東諸国の石油より安全に貿易が可能。
高安定	精製後は酸化しにくい。味も風味も変えないので、加工食品にはうってつけ。

パーム油は、その7割以上が食用に、3割未満が工業用に利用されます。主な用途は以下の通り。

食用	マーガリン類や粉末調味料、ショートニング、精製ラード、即席麺やお菓子・チェーン外食店での揚げ油、レトルト・冷凍など加工食品、他
工業用	石鹸・シャンプー類や洗剤、工業用潤滑油、樹脂、塗料、化粧品、医薬品など

4. 事件

1997年、インドネシアでの**森林火災**がメディアを賑わしました。ボルネオ島での森林火災が隣国のシンガポールやマレーシアをも煙で覆い、飛行機の発着にも影響が出たのです。原因は、プランテーション造成を急激に進める開発業者が、植林地造成のために森林に火を放ったからです。

また、同年、同じボルネオ島でもマレーシアのサラワク州で、プランテーション開発に反対するためにデモ行動を起こしていた村人たちに**警官が発砲**し、一人の男性が頭に銃弾を受け**死亡**しました。翌年には、違う村で、開発を進めるために、開発会社が雇った銃をもった**暴力団**が住民を乱闘に巻き込んだ結果、住民の正当防衛とはいえ、暴力団4人が亡くなりました。今、サラワク州では、土地開発をめくり100件以上もの**裁判**が起こされています。

2年前、テレビ朝日の「宇宙船地球号」という番組で、プランテーション開発により、棲息を脅かされるボルネオゾウとその保護活動家に取り上げられました。もちろん動物の窮状も直視すべきですが、ゾウと同じように、森に住む**先住民族**にも問題が及んでいるのです。

5. 先住民はなぜ反対するのか プランテーションはどう作られる？

油ヤシは、酸化を防ぐため、果房の収穫後24時間以内に搾油する必要があります。そのためには、すぐ近くに搾油工場がなければなりません。そのためには、果房を素早く運ぶためのトラック、トラクター、その他重機類や資材で莫大な初期資本を必要とします。採算を取るには、最低でも3000ha(正方形換算で5.5km四方)もの土地を必要とすると言われています。

マレーシアの油ヤシプランテーション面積は約388万ha(2004年)。うち、220万haを、100年ものプランテーションの歴史のあるマレーシア半島部が占めています。しかし、半島部にはもはや土地を開発する余地がなく、今、ボルネオ島のサラワク州とサバ州とで開発が進んでいます。だが、森には80万人もの先住民が住んでいて、最低3000haを必要とする開発では、村の一つや二つは呑み込んでしまうのです。

つまり、プランテーション開発は、どうしても先住民族の生存権と切り離して考えることができません。先住民の多くが、「伐採のほうがまだ！」と叫ぶその理由は、じつに明快です。

商業伐採での問題

マレーシアでは、商業伐採は「択伐」といって太い木だけを伐採する方法を採用しています。もちろん、太い木を見つけるための伐採用道路の建設や、細い木を倒して太い木までの切り出し道を作るなどで被害は甚大です。重機類が走り回った森は、雨が降ると泥が川に流入し河川を汚染し、また、重機類やチェーンソーの音に食料源や収入源であるイノシシや鹿などの野生動物が姿を消すなどの問題が起きています。だが、企業は太い木がなくなればその土地を去っていきます。そうすれば、何十年かかるかはわかりませんが、また元の森に戻る可能性はあります。先住民族はそこに淡い期待をするのです。

プランテーション

ひとたびプランテーションが造成されたらどうなるのか。それは、既に1世紀近いプランテーションの歴史があるマレー半島で証明されています。企業は半永久的にそこで操業を続けるのです。つまり、先住民族にとって生活の場である熱帯林はもう子孫代々戻ってこないことを意味します。

どちらの場合でも、サラワク州では、毎年、道路封鎖などの抗議行動を展開しては、多くの人が逮捕されています。

6：労働者・女性の問題

マレーシアにおいては、プランテーション問題は2つの場所で分けて考える必要があります。一つが、今まさに皆伐されようとしている熱帯林に住むボルネオ島先住民の問題。もう一つが、既に1世紀近くもの歴史があり、その中で起きてきている様々な労働問題に直面する半島側プランテーションに住む労働者の問題です。半島側の問題を以下のように整理してみました。

低賃金	マレーシアの最低賃金は300リンギ(約8400円)前後。プランテーションでもそれくらいは稼ぐが、特異なのは、一人ではなく、家族全員によってやっと稼げる額ということ。
児童労働	低賃金ゆえ、児童労働が当たり前になっているプランテーションは多い。マレーシアの国勢調査でも、10歳以上14歳未満の子ども2万2000人がプランテーション(ゴムも含む)で働いていることが明らかにされている。10歳未満の子どもに関してはデータすらない。特に女の子ほど、教育の機会は与えられない。プランテーションで育つ子どもたちは、大きくなって、同じプランテーション労働者と結婚し、その子どももまた・・・という歴史がもう1世紀近くも続いているのだ。
農薬	マレーシアでは、ベトナム戦争で使われた枯れ葉剤の成分「2,4,5-T」「2,4-D」が流通している。パラコートの上昇が高い。農薬被害は三桁を数え、下半身不随になった青年もいる。背中に背負ったタンクから農薬を顔に浴びてしまい、失明や死亡した女性もいる。農薬散布は軽作業ゆえに、女性が担うことが多い。マレーシアの女性弁護士が、50人の女性労働者をアト・ランダムに調査したら、健康だったのはわずかに2人だった。

もちろん、それほど問題のないプランテーションも多い。マレーシア半島の油ヤシプランテーションの半分弱は、FELDA(連邦土地開発庁)が運営する国営プランテーション。賃金はそこそこいい。そして、こういう好条件の国営プランテーションでは、国のマレー人優遇政策により、多くの労働者がマレー人である。半島では、プランテーションは、奥地に行くほどに、その労働条件は劣悪になる。

7：伐採とプランテーションの比較 - 「伐採はまだましだ」

伐 採	プ ラ ン テ ー シ ョ ン
択伐方式。森の5～6割は残る。	皆伐。数億年の歴史をもつ熱帯林は消滅する。
大型動物は姿を消す。生態系の悪化。	すべての動物がいなくなる。生態系の消滅。
太い樹がなくなった時点で企業はその土地を去る(10年くらい)。森は将来復元可能。	ひとたび操業を始めたら、企業は半永久的にそこに留まる。先住民族に土地は返ってこない。
闘って森を取り戻すことが可能。	造成後に闘っても森は戻らない。
川は土砂で汚れる。	川は農薬汚染される。
丸太は日本では、7割が建設現場の建材で3割が家庭での家具などに使われる。	生活への浸透度は木材をはるかに超えている。上記の表を参照のこと。

8：解決できるのか？

パーム油生産量は10年前の倍になりました。それは、ボルネオ島での急速な開発を意味すると同時に、動物だけではなく、人間への被害急増も意味します。

パーム油製品は今、いわゆる大手民間企業だけではなく、生協や自然食品店など、環境を標榜する組織においても売られています。これはなぜでしょうか？ 答えは「問題の存在をほとんど知らないから」というしかありません。しかし、本日、問題の一端を知った皆様が、この問題をどう捉え、どう行動していくのか、心からの期待をしたいと思います。